内外交差点

公共交通と街の風景から考える信頼のカタチ
タクシー世界一周記<欧州編①>

成川　史華氏　（扇交通社長）　第６／12回

学生時代から、どうしても行ってみたい都市が二つあった。パリとロンドンである。ファッションデザインに憧れていた時期があり、パリコレのデザイン画を集めては眺め、ため息を吐くこともあった。大学時代には友人とスイス、ドイツ、イタリアを巡ったが、パリとロンドンへの訪問は叶わなかった。社会に出ればまとまった休暇は取りにくい。ならば、帰国前にヨーロッパへ寄ろうと決めた。カナダから見ればロンドンは「すぐそこ」であり、友人たちも気軽に訪れていた。日本からの地理感覚とは異なる。まさに世界の見方が変わる体験だった。

今回の旅のスタートはカナダ東端・セントジョーンズから。一番驚いたのは島民たちの溢れる優しさである。横断歩道のない道路に向かって立ち止まるだけで車は必ず停まってくれるのだ。一般ドライバーにも歩行者優先の徹底がなされているが、街中を見ても特にそのような警告が書かれているわけではない。島民たちの間に当たり前にある文化なのだ。さらにはタクシーを呼ぶ術がなかった時にヒッチハイクを試みていたら、近くのアパートから出てきた女性が心配して声をかけてくれたり、タクシーに忘れ物をしたらこちらが気づく前に乗務員さんが届けにきてくれたりしたのだ。日本では財布を落としたって返ってくるのでしょ？とカナダの友人が言っていたのを思い出した。

続いてイギリス・ロンドンへ渡った。空港から市中心部のヴィクトリア駅まで「１時間」と聞いていたのに、実際には倍の２時間を要した。都市構造と公共交通の整備と言うのは、重大な課題だろう。ここでは欧州で盛んにやり取りが行われているという噂の「カウチサーフィン」というアプリを試してみることにした。これは異国の地からやってくる旅人に部屋の中のソファを貸し出す民泊サービスで、貸し主は無料での提供のみだが旅人はお礼として自国のお土産などを持って行くなど現地の人と旅人との交流手段の一つとして人気があった。今回の旅はある程度大きな都市ばかりだったので水回りの汚さを心配する必要がなく交流することを第一の目的として流行りに乗っかってみることにしたのだ。同世代の黒人女性の家に泊めてもらったが、彼女も異国の旅人との交流をとても楽しんでいた。移動では交通系ＩＣカード「オイスターカード」をチャージし、バスや地下鉄を乗り継いだ。赤い２階建てのロンドンバスは映画やドラマで描かれるそのまま。特に印象に残ったのは都市交通そのものであり、前出の通り、その特に渋滞の深刻さであろう。ロンドンには学生時代の友人が住んでいたので観光地とは違う住宅街を訪ねることもあった。どう行けばいいか調べようと使ったのが電車もバスも全て一括で調べられる乗換案内のようなＭａａＳアプリだ。当時は日本でそのようなアプリはなく不便さを感じていたところだったので現地の人に教えてもらった時は驚いたものだ。日本の路線バスもなかなか乗り慣れないと大変で、バスを使う生活に慣れていなかったこともありロンドンでも右往左往した。人に聞きながら乗り継いでやっと友人の元へ到着したのも旅の醍醐味か。

不快感がとても強かったのが大英博物館だ。美大卒の私としてはどんな展示なのかルンルンしながらとっても楽しみにして行ったが、なんと入り口周辺には10～20代と思われる若者たちが無料のＷｉ－Ｆｉを目当てに床に座り込んでお菓子やジュースを飲みながらおしゃべりしている。さらには「Don't touch」と書かれているにも関わらず彫刻や絵画をベタベタ触る見学者たち。唖然としたし、アートの先駆者たる欧州の博物館でこのような杜撰な管理なのかと思うと悲しかった。一時、日本にも無料Ｗｉ－Ｆｉを普及させようとする動きがあったが、こんなことになるなら無料じゃなくていいと公共空間のあり方について考えさせられる場面だった。

様々な感情を抱きつつロンドンを後にして向かったのはオランダ・アムステルダム。古くからの友人が住んでいたので会いに行ったが、入国時に思わぬトラブルに見舞われた。ＥＵを出発するチケットをとっていなかったので不法滞在目的ではと疑われたのだ。別室で２時間ほど尋問を受け、日本人パスポートでこんなことあるんだと驚きながら高圧的な態度のスタッフと英語で口論。泣きながら「私は日本に帰るんだ」と訴え、やっと解放されたのが午後８時半。スーパーなどのお店はすでに閉まっており街中も閑散としていて寂しかった。ここではトラムを利用し、美術館や運河、風車のある町並みを見て回った。トラムの利便性が市内観光に直結しており、都市ブランドの一部を担っているのではないかとも感じた。

そして旅は、長年の憧れ花の都・パリへ。そこで待っていたのは、また違った交通文化と街の息づかいだった。